

■英国のことあれこれ (2)

心に残る言葉

中央大学教授
市川 泰男



言葉のなかには直ちに人の注意や関心を引く面白いものがある。またある言葉が、それを聞いた人だけ読んだりする人の心に残るものがあれば、その言葉を発した人の人格なり品位を表すものもある。

成田に向かう特急の車内電光の天気予報に「雨ときどき止む」という表示があって少し奇異に感じた。あとで調べると天気予報の正規の言い方であることがわかったが、私には、「雨ときどき曇り」などのほうがよほどしっくりくる。

ロンドンの地下鉄に乗って最初に耳にする Mind the gap. という放送も大抵の人の耳に残る言葉だろう。ずっと昔にケンブリッジの言語学科に籍を置いて、授業を聴講させてもらったことがある。語用論の授業で、女性の講師がいつも Let's make a start. と言って講義を始めたのを面白く感じた。

『吾輩は猫である』のなかに「落ちるのと降りるのはたいへんな違いのようだが、その実思ったほどのことではない。落ちるのを早くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちることになる。落ちると降りるは、ちとりの差である」という条があるが、これなど私は実に面白いと思う。

猫と言えば、S. Johnson が『英語辞典』を編纂した Gough Square にはジョンソンが可愛がっていた猫の彫像があり、次のような文言が刻まれている。

HODGE
'a very fine cat indeed'
belonging to
SAMUEL JOHNSON (1709-1784)
of Gough Square
'Sir, when a man is tired of London
he is tired of life: for there is in
London all that life can afford.'

ホッジは、それほど可愛い猫とは私には見えないが、これは人によって意見が異なるだろう。しかし「ロンドンに飽きたとき…」は名文だと思う。

ジョンソンのこの言葉などは多くの人の心に何かを感じさせる威力があるが、もっと個人的で、しかもその言葉を耳にしたときのその人の感情などによって心に沁みる語句もあるだろう。かつて、ロンドンでミュージカルの Les Misérables を見たときに、There are words that are better unheard, better unsaid. という歌詞を聴いて、いい文句だなと思った。

たった一つ言葉が心を躍らせることもある。私が鮮明に覚えているのは、これもまたずっと昔にケンブリッジでの在外研究の機会を与えられたときのことだ。客員研究員の便宜を図ってくれる部署から家族で滞在する家の住所が知らされてきたとき、しかも、その中に 15 High Street, Trumpington という文字を見つけたときには本当に胸躍る思いがした。『カンタベリー物語』の中のどこかにトルンピングトンという地名があることを思い出したからだ（「家扶の話」に出てきて、ケンブリッジから約3マイル南にある、と注にある）。

ある一言がその人の品格・人格を表すことがある。ケンブリッジでの2年目にダーウィン・コレッジに客員研究員として在籍することになったが、その申し込みをする際に、言語学科の Matthews 先生の代行役であった Moore 先生に推薦状を書いていただいたことがある。お忙しいのに貴重な時間を割いていただきありがとうございますと礼を言ったら、That's my job. と笑顔で答えてくださった。私も学生に推薦状を頼まれることがたまにあるが、お礼を言われるときにはいつもこの話をして同じように締めくくりにしている。